

研究区分	教員特別研究推進 地域振興
------	---------------

研究テーマ	パーキンソン病患者における非定型抗精神病薬の使用実態調査：後ろ向き観察研究				
研究組織	代表者	所属・職名	薬学部・特任教授	氏名	山田 浩
	研究分担者	所属・職名	薬学部・客員共同研究員	氏名	古島 大資
			静岡県立総合病院・副院長	氏名	原田 清
			静岡県立総合病院 脳神経内科・部長	氏名	金 剛
			静岡県立総合病院 脳神経内科・医長	氏名	吉田 英史
			静岡県立総合病院 脳神経内科・医長	氏名	勝山 祐輔
	静岡県立総合病院 脳神経内科・医員	氏名	中村 大和		
発表者	所属・職名	薬学部・特任教授	氏名	山田 浩	

講演題目	パーキンソン病患者における非定型抗精神病薬の使用実態調査：後ろ向き観察研究
研究の目的、成果及び今後の展望	<p>パーキンソン病 (Parkinson's disease; PD) は運動症状に加え、非運動症状として精神症状が出現することが知られている。精神症状の治療は PD 治療薬の減量・中止や非定型抗精神病薬 (atypical antipsychotics; AAP) の投与が検討されるが、AAP の使用に関する明確なエビデンスは未だ確立していない。本研究では、診療情報データベースと電子カルテの閲覧に基づき、PD 患者における AAP の使用実態とその有効性や適正使用に関する知見を得ることを目的として、後ろ向き調査を実施した。</p> <p>2012 年 4 月から 2019 年 7 月の間に静岡県立総合病院脳神経内科の受診歴のある PD 患者のうち、抗精神病薬の処方履歴のある患者を診療情報データシステムを用い、「病名」と「医薬品」の検索から抽出した。次いで、抽出した患者の診療情報を電子カルテの直接閲覧により確認した。結果、PD とその類似疾患患者 3540 名、抗精神病薬処方歴のある患者 8635 名が抽出され、両方に該当する患者 258 名のうち適格基準を満たした 15 名を解析対象とした。PD 患者の年齢は 70~79 歳 (9 例, 60%)、Hoehn-Yahr 重症度分類は III 度以上 (11 例, 73.3%)、PD 治療薬数は 2 剤以上 (9 例, 60%) が多かった。AAP の使用はクエチアピンが最も多かった (10 例, 66.7%) が、複数の AAP を使用した際にクエチアピンよりもオランザピンが先もしくは同時に使用される傾向があった。一方、オランザピン投与で運動症状の著明な悪化がみられた例があった。</p> <p>以上より、AAP の使用はクエチアピンが最も多く、既存のエビデンスやガイドラインに沿った治療が実施されていた一方、有効性や安全性の観点から他 APP の選択が行われる場合もあることが示された。本研究は単施設かつ少数例の検討であることから、結果の一般化においては、今後、大規模な研究を検討する必要がある。</p>